

- 何と変わったね、ペペ！
- 言わないで、言わないで、それは自分でも分かっているんだよ、太って禿になっただろ。私の事は思い出さないで。
- 君はそれに引き替え同じだね。
- そう、老けたのは同じだね。その上この何日か良くないよ。
- ヘスのことで心が乱れている。
- 恐ろしい、本当に恐怖だ。君は殺人かも知れないと言うことを知っているかい？
- うん、昨日か一昨日ある友人がそのことを話してくれた。
- 私は不思議に思っているのだ、彼が自殺だなんて、何故なら元気で、体調も良かったので...然し殺人なんて理解できない。誰が殺したのだろう、とりわけ何のためにかが理解ができない。
- テレサが私に言ったのだが“有閑階級”について記事を準備していたと言うことだ。此れについて君何か知っている？
- うん、1、2ヶ月前に、雑誌のディレクターが彼に任したのだ。彼はこのテーマを望まなかった。怠惰だった、上流階級そして浅薄な人間を扱わねばならないことにやる気が出なかった。然し君も分かっているように、ディレクターがそれを依頼すれば、一生懸命やらねばならないだろう。
- 彼のマラベジャの旅はどうだったのだろう？
- 多分良かったと思う、疲れて帰って来た、そして私に少しだけ話をした。
- ねえ、ファン ルイス、君にとってこの事件についてヘスが持っていたすべての資料を探すのは迷惑かい。私にコピーを取って渡してくれないか？
- いいや大変なことではないよ。今すぐね、食事が終わったら書斎に上がり資料を探しコピーを試みよう。
- 完璧、ねえ、ロメラレスはやって来た？
- いいや。